

小学校3年英語科

「好きなTシャツはな～に？」（全5時間）

授業者 安彦 有里恵

実践のポイント

この実践は、北海道教育大学と共同で制作した研究開発学校オリジナルの教材を使用したものです。子供たちが自分たちのアイデアを生かしながら進んで学習に取り組むことができるよう、自分の好きな物をデザインしたオリジナルTシャツを作り、誰のものかを当てる活動を取り入れました。

授業のねらいと展開

この授業のねらいは、友達の好きなものをインタビューしながら、友達の作ったTシャツを当てる活動を通して、友達の興味・関心や好みは様々であると気付くことができるようにすること。また、既習の表現を場面に合わせて選んで使いながら、積極的に友達と好きな物を尋ねたり、自分の好きな物を伝え合ったりしようとすることです。この学習を通して、英語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや言語を用いてコミュニケーションを図る大切さを知り、相手意識をもって英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする資質・能力を育成していきます。そのために、以下のような学習活動を展開しました。

学習活動の展開

- ① 学習計画を立て、単元の見通しをもつ。(第1時)
- ② ペアやグループで定型表現の練習、カルタとりゲームをする。(第2～3時)
- ③ 自分の好きな物を表すオリジナルTシャツを作る。(第4時)
- ④ 友達の好きな物を聞いたり、自分の好きな物を言ったりして、誰のオリジナルTシャツなのかを当てる。(第5時)



①学習計画を立て、単元の見通しをもつ



②定型表現の練習、カルタとりゲーム



③自分の好きな物を表すオリジナルTシャツを作る



④誰のオリジナルTシャツなのかを当てる

視点1:学びの文脈のある単元を構想する

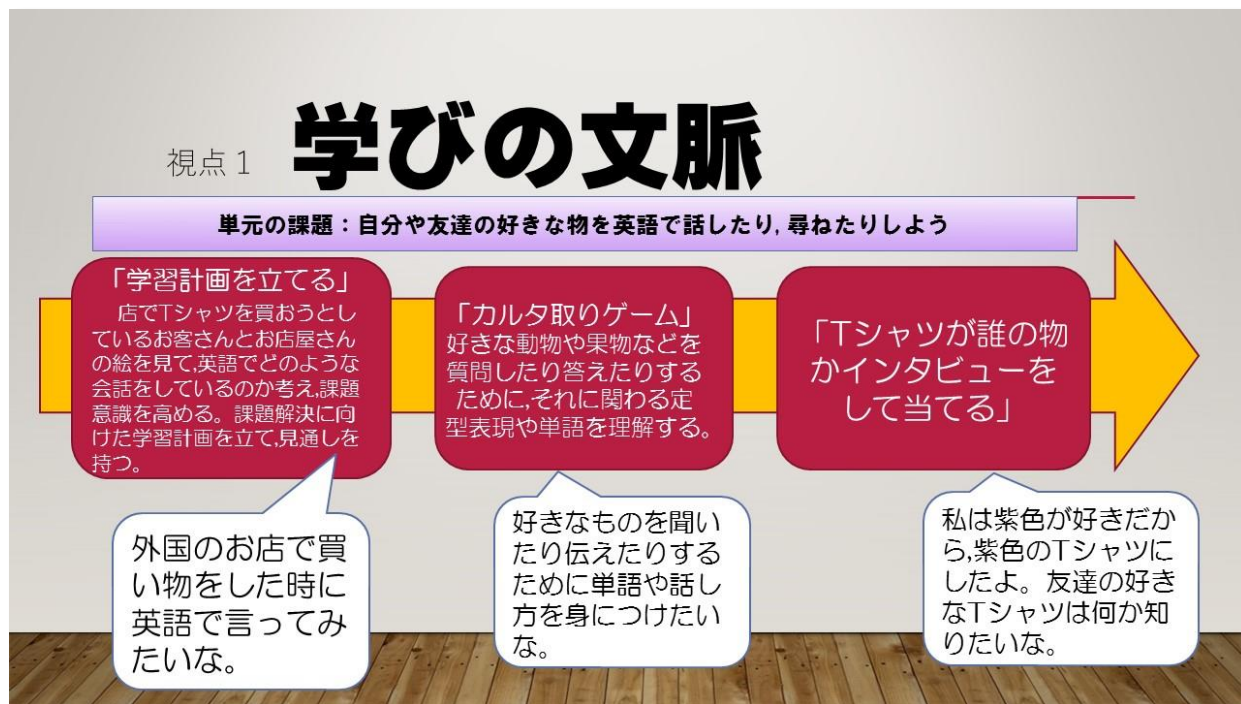


図1 本実践における「学びの文脈」のイメージ

子供が学びの連続性、必要性、関連性を自覚しながら学ぶことができるよう「学びの文脈のある単元を構想」します。そのために、本単元で学習する単語の設定については、子供がその単語を習得する必要性が高まるよう、事前のアンケートをもとに、子供たちが好きな色、動物、果物として多かった単語を取り上げて学習を進めました。

また、単元の開始期に、子供が学習内容に興味をもち課題意識が高まるよう、お客さんがTシャツを買おうとしている絵を見て、どんなことを話しているのか想像する活動を設定しました。(写真1) 子供たちは、「どっちのTシャツにしようか迷っているんだ。」「好きな色や動物を聞いているんじゃないかな。」「英語で好きなものを質問するのはどういっばいいんだろう。」と口々に言い出しました。これらの言葉を生かし、「自分や友達の好きなものを話したり、尋ねたりしよう。」という課題を生み出しました。さらに、課題意識が高まったところで、課題を解決する方法として、一人一人が自分のオリジナルTシャツをデザインし、それぞれのTシャツが誰の物かインタビューをして当てるという活動を提示しました。



写真1:お客さんがTシャツを買おうとしている絵

次に、どんな学習を進めていけば、自分や友達の好きなものを話したり、尋ねたりできるか、学習計画を立てました。子供と学習計画を考えることにより、課題を明確にし、これからの学習に見通しをもつことができました。子供が学習の見通しを持つことで、好きな動物や果物などを質問したり答えたりするために、それに関わる定型表現や単語を理解する必要性が高まります。そこで、ペアやグループで「What color do you like?」「I like~」を使ったカルタとりゲームを取り入れ、定型表現や単語を理

解できるようにしました。

子供たちは具体的なコミュニケーション場面の提示により課題意識を高め、教師の提示したゴールイメージでもあるコミュニケーション活動を行うための学習計画を考えることで、必要な学習活動を見通し、必要感や必然性をもち主体的に学習する姿が見られました。

視点2:必要感のある協同的な学び

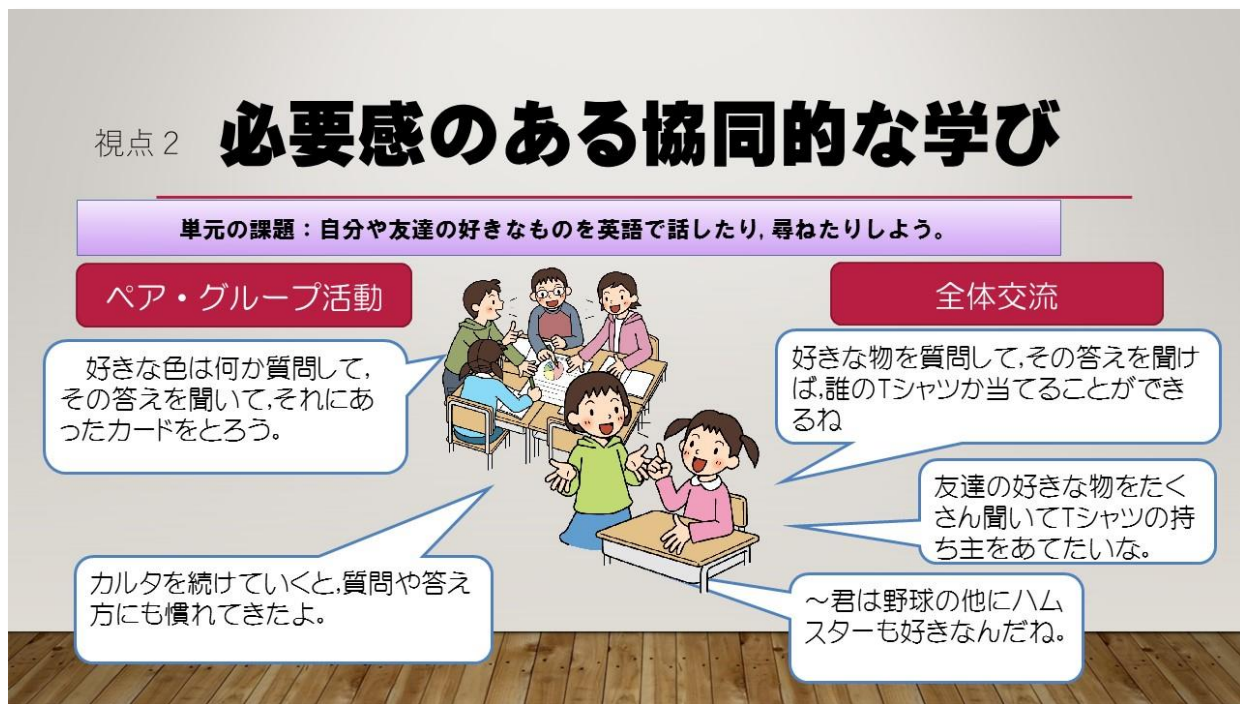


図2 本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

「考えを比べてみたい、深めてみたい、いっしょに学んでみたい」等、子供が必要感をもち、友達と学びを深め合える場面を下記の意図に基づいて設定しました。

必要感のある協同的な学びを展開するために

- ① 友達と交流することの楽しさや価値を実感し、交流方法の定着が図られるよう、様々な場面で友達と交流する学習活動を設定する。
- ② 友達との交流への意欲をより高めるため、具体的な交流の人数や難易度の高いモデルを例示する。
- ③ 子供が友達と「話したい、聞きたい」と思えるような活動（自分のオリジナルTシャツをデザインし、それぞれのTシャツが誰の物かインタビューをして当てる活動）を設定する。

①の様々な場面で友達と交流する学習活動を設定することについて、本実践だけでなく年度当初より、様々な学習場面で交流場面を意図的に設定していきました。交流の方法やルールなどを子供と確認したり、交流について振り返ったりすることをくり返し、交流方法の定着を図ってきました。特に留意した点は、決まった仲間同士にならないようたくさんの人との交流を目指しました。本単元においては、英語を繰り返し聞いたり言ったりしな



写真2：協同的な学びで語彙の習得を図る

が少しずつ覚えていけるようにするための活動として、ペアやグループで「定型表現の練習」（写真2）や「カルタとりゲーム」を設定しました。この活動が語彙の習得につながり、子供たちは協同的に学ぶことの価値を実感していきました。

②の交流への意欲を高めることについては、オリジナル T シャツのインタビューの前に、先生の方から、「8名と交流できたらいいね。」と具体的な目標人数の提示や、デザインの情報量の多い T シャツを赤い点線で囲み、「この T シャツは当てるのが難しいから当てられたらすごい!」というような意識付けにより、子供たちの意欲的な交流につながっていきました。

③に関わって子供が友達と「話したい、聞きたい」という思いがもてるような活動を設定しました。子供たちが好きな色やデザインを選んで、自分だけのオリジナル T シャツを作ることで、子供たちが「その T シャツを友達や先生にも紹介したい」、「友達の T シャツのことも知りたい」という友達とコミュニケーションを図る必要感を生むことができたと考えます。

視点3:目的に応じた弾力的な振り返り

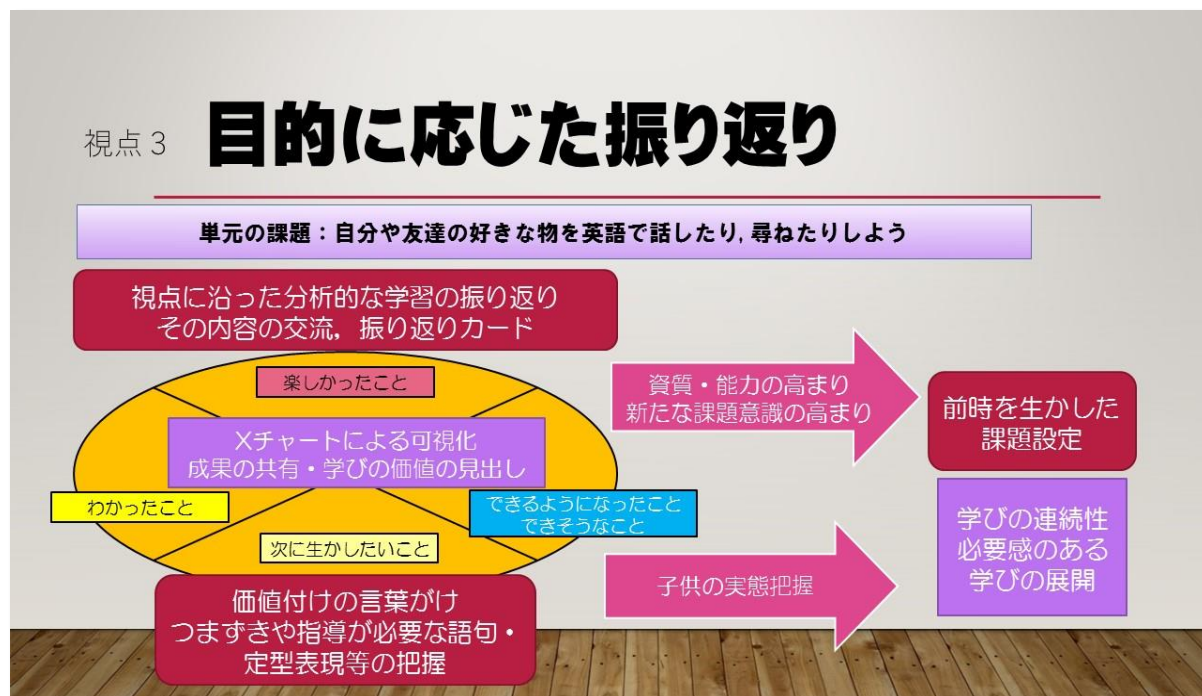


図3 本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ

学習の成果や課題を自覚化したり共有したりすることで、次の学びが一層深まりのあるものになると考えます。そのためには、図3にあるように、振り返り内容を具体的に述べるよう促したり、適切な価値付けの言葉をかけたり、Xチャート等を用いた黒板上で可視化し共有できるようにしたりしながら、振り返りの場面を設定する必要があると考えます。具体的には以下のようになります。

「目的に応じた弾力的な振り返り」具体例

- ・ 「楽しかったこと」「わかったこと」「できるようになったこと」「次に生かしたいこと」等の視点に沿った振り返りを行う。
- ・ 振り返り内容を交流し、学習の成果を共有、実感したり、自分や友達の学びのよさを認め合ったりする。
- ・ その時間の成果や課題に基づいて次時の学習計画を立てたり修正したりする。
- ・ 振り返りの視点に沿った自由記述形式による振り返りカードを使って学習の振り返りを明示的に行いながら、資質・能力の高まりを実感する。

授業の振り返りを全体に投げかけた場合、積極的に発表できる子もいれば、考えることに時間がかかったり、発表に抵抗感をもったりする子もいると想定できました。そこで、振り返りカードに記入してから交流する形をとりました。子供たちが振り返りカードに記入している様子を教師が見取りながら、意図的に指名することができ、全体で共有したい考えを授業の中で取り上げる（写真3）ことができたと考えています。

単元のまとめ期の振り返りでは、「外国で習った表現を使いたい。」という子供の発言から、学習した表現を自分の生活に生かしたいという思いをもたせることができたと考えています。また、「～くんは意外と黄色が好きなのがわかった。」などオリジナル T シャツを当てる活動により、友達の好みや考えを知ることができた子供が実感している様子も見取れました。この学習を通して、英語で好きな物を尋ねたり答えたり、友達の考え方や好みを知ったり、会話を楽しんだりすることができました。

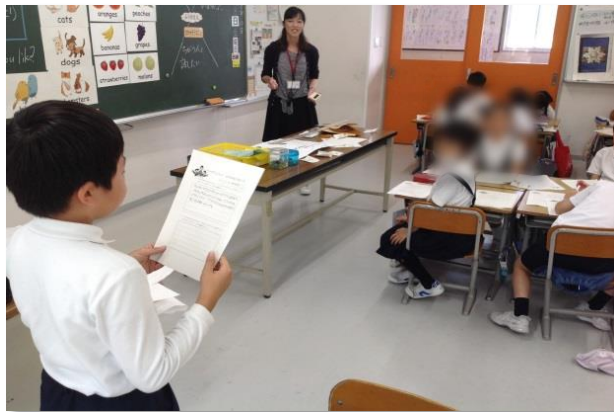


写真3：共有したい振り返りの内容を授業の中で取り上げる

授業者からのコメント

「英語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや言語を用いてコミュニケーションを図る大切さを知り、相手意識をもって英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする資質・能力」の育成を目指し、上記の3つの視点を持ち授業を展開してきました。特に効果的であったと感じた教師の支援および、課題となった点を以下に示します。

○ ゴールイメージを子供と共有化する

子供とのゴールイメージの共有化できるよう、コミュニケーションの場面を具体的にイメージできる場面を提示し課題意識を高め、子供と共に学習計画を立てました。これにより、子供は学習の見通しをもち、課題解決のために主体的な学習を進めることができたと考えています。「ゴールイメージが明確になっていることで、学習の振り返りの中で、学習を生かしたい場面が具体的にイメージでき、こんな場面で英語を使いたいという思いを高めることができました。」このような思いが高まることで、英語に関する知識や技能を身に付ける必要感が高まり、それに関する深い理解につながっていく子供の姿を見ることができました。

○ コミュニケーション活動を工夫し、振り返りを充実させる

本実践では中心となるコミュニケーション活動として、「友達の好きなものをインタビューしながら、友達の作った T シャツを当てる活動」を設定しました。子供たちが好きな色やデザインを選んで、自分だけのオリジナル T シャツを作ることで、「友達や先生にも紹介したい。」「友達はどんな T シャツをつくったのだろう?」といった、友達とコミュニケーションを図る必要感が生まれた点がこのコミュニケーション活動のよさだと考えます。

さらに、そのコミュニケーション活動後の振り返り場面を大切にしました。振り返りの内容を X チャ

ートにより焦点化・視覚化・共有化を図る（写真4）ことで、子供は学習の価値を実感する姿が見られました。友達とコミュニケーションをとることで、友達の好みが変わったことをうれしそうに発表したり、好きな色や好きなスポーツなどを認めたりする様子が見られました。子供たちの振り返りカードの記述からも、「英語を用いてコミュニケーションの楽しさを知る」ことや「相手意識をもって英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする」といった資質・能力の高まりが見られたと感じています。



写真4：Xチャートを用いた振り返りの焦点化・視覚化・共有化

子供たちの振り返りカードの記述

- ・10人とインタビューしてTシャツが当てるのが楽しかった。
- ・これまで習った言い方を外国のお店で実際に使ってみてみたい。
- ・～くんが意外と黄色が好きなのがわかった。
- ・今日は～くんが誕生日だとわかった。たんじょうびおめでとうと言えた。

● より相手意識をもったコミュニケーションを目指す

コミュニケーションという点では、友達のオリジナル T シャツを当てる活動の時に、友達の好みを聞いて、「good」や「nice」などの反応が出てくるとよいと思いました。英語で会話していく中で身に付いていくことではあると思いますが、形式的なコミュニケーションにならないような手立てが必要だと感じました。より相手意識をもったコミュニケーションになるよう、今回の実践であれば、友達のオリジナル T シャツに反応できる「やりとり」が生まれるような支援の在り方を検討していきたいです。

● 日本と外国の文化の違いに触れる機会を継続的・意図的に設定する

日本と外国の文化に関して共通点や相違点に気付き、多様なものの見方や考え方を認め合う資質・能力を育むために、日本と外国の言語の違いだけでなく、生活・習慣・行事・文化など様々な場面で紹介し、子供たちが外国の文化について気付く機会を教師が意図的に設定していくべきだと思います。例えば、本単元では、単元のはじめのお店で買い物をしている絵を見る場面において、「外国で T シャツは〇〇ドルで売られているんだよ。」というお金の情報など、外国の文化に触れることもできたと感じています。したがって、本単元だけでなく、年間を通して、外国の文化や習慣の違いを子供が気付くことができるよう、支援の在り方を模索していきます。